

トロツコ

芥川 竜之介



一冊堂青空文庫

トロツコ

芥川龍之介

小田原熱海間あたみに、軽便鉄道敷設ふせつの工事が始まったのは、良平りょうへいの八つの年だった。良平は毎日村外はずれへ、その工事を見物に行つた。工事を——といったところが、唯ただトロツコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロツコの上には土工が二人、土を積んだ後うしろに佇たたずんでいる。トロツコは山を下くだるのだから、人手を借りずに走って来る。煽あおるように車台が動いたり、土工の袷天はんでんの裾すそがひらついたり、細い線路

がしなったり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロツコへ乗りたいと思う事もある。トロツコは村外れの平地へ来ると、自然と其処そこに止まってしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロツコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロツコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或ある夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロツコの置いてある村外れへ行っ

た。トロツコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んで
る。が、その外は^{ほか}何処^{どこ}を見ても、土工たちの姿は見えなかった。
三人の子供は恐る恐る、一番端^{はし}にあるトロツコを押した。トロツ
コは三人の力が揃^{そろ}うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこ
の音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚か
さなかった。ごろり、ごろり、——トロツコはそう云う音と共
に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行つた。
その内にかれこれ十間程^{けん}来ると、線路の勾配^{こうはい}が急になり出し
た。トロツコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。
どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうにもなる事がある。

良平はもう好よいと思ったから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乗った。トロツコは最初徐おもむろに、それから見る見る勢いきおいよく、一息に線路を下くだり出した。その途端につき当りの風景は、忽たちまち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮はくぼの風、足の下に躍おどるトロツコの動揺、——良平は殆ほとんど有頂天うちよつてんになった。しかしトロツコは二三分のちの後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ」

良平は年下の二人と一しよに、又トロツコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこ
う云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断つてトロに触った？」

其処には古い印禅天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工が佇んでいる。——そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出していた。——それぎり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロツコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない。唯その時の土工の姿は、今

でも良平の頭の何処かに、はつきりした記憶を残している。薄明
りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さ
えも、年毎としごとに色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたってから、良平は又たった一人、午過ぎひるの工
事場に佇みながら、トロツコの来るのを眺めていた。すると土を
積んだトロツコの外ほかに、枕木まくらぎを積んだトロツコが一輛りょう、これは本
線になる筈はずの、太い線路を登って来た。このトロツコを押してい
るのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だ
か親しみ易いやすような気がした。「この人たちならば叱しかられない」
——彼はそう思いながら、トロツコの側そばへ駈かけて行つた。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——縞しまのシャツを着ている男は、俯うつむ向きに卜
口くちツつ口くちを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われは中なか中なか力ちからがあるな」

他たの一人、——耳みみに巻煙草まきたばこを挟はさんだ男も、こう良平を褒ほめてく
れた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さ
なくとも好よい」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでな

らなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえ切れずに、お怯ずお怯ずこんな事を尋ねて見た。

「何時いつまでも押し続けていて好いい？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑みかんばたけに、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路みちの方が好い、何時いつまでも押させてくれるから」——良平

はそんな事を考えながら、全身でトロツコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りくだになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直すぐに飛び乗った。トロツコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匀においを煽あおりながら、ひたすべ込りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風を孕はらませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪たけやぶのある所へ来ると、トロツコは静かに走るのを止やめた。三人は又前のように、重いトロツコを押し始めた。竹藪は何時か雑

木林になった。爪先^{つまさき}上りの所^{ところどころ}所^{ところ}には、赤錆^{あかさび}の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやつと登り切ったら、今度は高い崖^{がけ}の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロツコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれば好^いい」——彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロツコも彼等も帰れない事は、勿論^{もちろん}彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切崩きりくずした山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児ちのみごをおぶった上かみさんを相手に、悠悠ゆうゆうと茶などを飲み始めた。良平は独りいらしながら、トロツコのまわりをまわって見た。トロツコには頑丈がんじょうな車台の板に、跳ねかえった泥が乾かわいていた。

少時しばらくの後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳はさに挟んだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）トロツコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子だかしをくれた。良平は冷淡に「難有ありがとう」と云った。が、直すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思い直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子に

は新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついていていた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜を登って行つた。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいった後、良平はトロツコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかつた。トロツコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木まくらぎに手をかけながら、無造作むぞうさに彼にこう云った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」
「あんまり帰りが遅くなるとわれの家うちでも心配するすら」

良平は一瞬間呆気あつけにとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途みちはその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならない事、——そう云う事が一時にわかったのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思った。泣いている場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取って附けたような御時宜おじぎをす

ると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平は少時しばうく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懐ふところの菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側みちばたへ抛ほり出す次手ついでに、板草履いたぞうりも其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋たびの裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙はるかに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路さかみちを駈かけ登った。時々涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪ゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もう火照りてが消えかかっていた。良平は、愈氣こゝろが気でなかった。往ゆきと

返^{かえ}りと変るせいか、景色の違^{ちが}うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡^ぬれ通ったのが気になったから、やはり必死に駈^かけ続けたなり、羽織を路側^{みちばた}へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助^{たす}ければ――」良平はそう思いながら、^{すべ}迂^{まが}つてもつまずいても走^{はし}って行^いった。

やっと遠い夕闇^{ゆうやみ}の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくな^なった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣^なかずに駈^かけ続けた。

彼の村へはいって見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさ

し合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはつきりわかった。井戸端に水を汲んでいる女衆や、畑から帰って来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駆けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何か云いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ啜り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆

も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣わけを尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子さいしと一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆しゅふでを握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞じんろうに疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断

続している。……

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
